



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

しらこまひとみ  
博多の歴女 **白駒妃登美**

✿ 日本一の私塾

江戸期の日本は世界屈指の識字率を誇り、人々の向学心は実に旺盛でした。寺子屋で初等教育を受けた後、更なる高みを目指し私塾に進む者もいました。江戸時代後期には千以上の私塾が存在したと言われますが、その中で、入門者が四千人を超え日本最大規模を誇ったのが、広瀬淡窓が主宰する豊後(大分県)の漢学塾・咸宜園です。

「咸く宜し」すべてのことがよろしい」の名が示すように、咸宜園は身分、学歴、年齢を問わず広く門戸が開かれ、一人一人の資質が尊重されました。他の私塾が専門教育に力を入れたのに対し、咸宜園が「教」と並んで柱にすえたのが「治」。淡窓は、全門下生に共同生活の役割を振り分け、生活習慣の指導を徹底し、人間教育に取り組んだ

— 広瀬淡窓の妹・秋子

愛する喜びに生きて

のです。

さらに淡窓は独自のシステム「月旦評」を考案しました。門下生に毎月試験を実施し、一級から九級までの番付を発表するのです。月旦評は、どんなに忙しくも、たとえ旅先であっても、必ず淡窓本人がつけることを常としました。「咸く宜し」の眼差しで数千人を励まし、その成長を見守った淡窓。このエネルギーはどこから来たのでしょうか。

✿ 兄の命のために

広瀬家は天領・日田を代表する商家として栄えてきました。しかし、ある時、父の弟の事業が破産し、窮乏します。それまで箱入り娘のように大切に育てられてきた、淡窓の二歳下の妹・秋子は、辛い水仕事も厭わず、家族のために懸命に働きました。家族が心一つにして危機を乗り越えた

広瀬秋子 天明4年生まれ。幼名は安利。咸宜園を開いた広瀬淡窓の妹。「広瀬八賢」(1784-1805)の一人として、その遺徳は、地元・日田の人々から今なお慕われている。

【イメージイラスト】アオジマイコ